



ショートコメント

★★★★

Data 2022-14

脚本：ウェス・アンダーソン
 出演：ビル・マーレイ／ティルダ・スウィントン／フランシス・マクドーマンド／ジェフリー・ライト／オーウェン・ウィルソン／ベニチオ・デル・トロ

フレンチ・ディスパッチ
 ザ・リバティ、カンザス・イヴニング・サン別冊

2021年／アメリカ映画
 配給：ディズニー／108分

2022 (令和4) 年2月5日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

 みどころ

このタイトルは一体なに？それはフランス発の夢の雑誌の名前だが、実は架空。ウェス・アンダーソン監督が高校生の時に夢中になった雑誌“ザ・ニューヨーカー”に、文字ではなく映像でオマージュとして捧げたのが本作らしい。

濱口竜介監督の『偶然と想像』（21年）も3つの短編から構成されていたが、遺言により編集長の追悼号になった最終号もかなり変わった3つの物語で構成。こりゃ、おもしろい。しかし、ちょっと独りよがりかも・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆ウェス・アンダーソン監督の『犬ヶ島』（18年）はイマイチだった『シネマ42』未掲載）が、『グランド・ブダペスト・ホテル』（14年）（『シネマ33』17頁）は素晴らしい。そんなウェス・アンダーソン監督の記念すべき10作目が本作だが、『フレンチ・ディスパッチ』って一体なに？それはフランスの架空の街にあるアメリカの新聞社“カンザス・イヴニング”の支局が編集している雑誌の名前だが、それってホント？いやいや、それは全くの嘘らしい。

1925年に創刊された雑誌“ザ・ニューヨーカー”に夢中になっていたウェス・アンダーソン監督の映画作りの原点と核はここから始まるらしい。なるほど、なるほど、ウェス・アンダーソン監督はそこにオマージュを捧げて本作を！

◆本作はフレンチ・ディスパッチの編集長アーサー・ハウイツァー・Jr が急死したところから始まる。彼の遺言によって、“フレンチ・ディスパッチ”は廃刊になることが決定したが、追悼号兼最終号は精いっぱいの内容にしなければ。そこで、腕によりをかけたユニークな記者たちが、町を紹介をする1本のレポートと3つの物語を掲載することになったわけだが、本作はそれを、ウェス・アンダーソン監督流の映像で！なるほど、なるほど。

ちなみに、「ザ・リバティ、カンザス・イヴニング・サン別冊」というバカ長いサブタイトルを見れば、ウェス・アンダーソン監督はとにかく本作を、アメリカの新聞“カンザス・

イヴニング・サン”の“別冊”として売り込みたいらしい。なるほど、なるほど。

◆美術界の裏も表も知り尽くしている批評家の J.K.L.ベレンセン（ティルダ・スウィントン）がレポートする、第1話「確固たる（コンクリートの）名作」は、獄中にある天才画家モーゼス・ローゼンターラー（ベニチオ・デル・トロ）が描いた「確固たる名作」について執筆するもの。モーゼスのような天才画家がなぜ獄中にいるの？また、美術商のジュリアン・カダージオ（エイドリアン・ブロディ）は、如何にして彼の価値を見出したの？更に、モーゼスの絵画のモデルになっているのは女性看守のシモーヌ（レア・セドゥ）だが、なぜ彼女はモーゼスのヌードモデルまでやっているの？

レア・セドゥは私の大好きなフランス人の美人女優だが、その大胆なヌード姿にビックリ！（うっとり？）また、顔の長さですぐに覚えてしまう女優エイドリアン・ブロディや、一目見ただけでこちらもすぐ覚えられてしまう女優ベニチオ・デル・トロの本作に見る、怪演にもビックリ！なるほど、なるほど、これは面白い。しかし、ちょっと独りよがりかも・・・。

◆高潔なジャーナリスト、ルシンダ・クレメンツ（フランシス・マクドーマンド）がレポートする、第2話「宣言書の改訂」は、ティモシー・シャラメ演じる学生運動のリーダー、ゼフィレリ・Bと、それに恋する学生会計係の女子学生、ジュリエット（リナ・クードリ）らの物語。これは一瞬『レ・ミゼラブル』を思い起こさせる、いかにもフランス的な味付けで面白いが、これもちょっと独りよがりかも・・・。

◆祖国を追放された孤独な記者、ローバック・ライト（ジェフリー・ライト）がレポートする、第3話「警察署長の食事室」は、第1話、第2話以上に変わった物語。警官としても優秀な彼は、警察署長お抱えの天才シェフであるネスカフィエ（スティヴン・パーク）を取材する中で、とある誘拐事件に巻き込まれていくことに・・・。

第3話にはギャング組織の悪徳弁護士や主犯格の運転手らが登場し、かなりハチャメチャな物語が展開していくから、これもまた面白い。しかし、これもかなり独りよがりかも・・・。

◆本作の世界観は、ウェス・アンダーソン監督作品“御用達”のプロダクション・デザイナーであるアダム・ストックハウゼンによれば、「フランスの古い映画や写真でよく目にする、すすけた世界とポップな色彩が調和しており、オープニングからエンドロールまで情報量が半端ない、まるで“観る雑誌”のごとき完成度」らしい。しかし残念ながら、私の理解力では、そこまではとても、とても。そのため、やっぱりこの見解も独りよがりかも・・・？

2022（令和4）年2月14日記